事業の名称

茨城町の学校統廃合に対する支援事業

〔事業責任者〕

（自治体側）
（代表者氏名）茨城町教育委員会・教育長　鈴木　由美

（大学側）
（代表者氏名）茨城大学教育学部・教授　小川　哲哉

事業テーマ：地域の教育力向上

連携先

茨城大学教育学部　029（228）8311
茨城町教育委員会　029（292）1111

プロジェクト参加者

小川哲哉（茨城大学教育学部・教授
担当：プロジェクト統括責任者）
鈴木由美（茨城町教育委員会・教育長
（担当：プロジェクト実施責任者）

プロジェクトの実施概要

①プロジェクトの目的

多くの自治体が抱えている学校統廃合への支援を通して，地域の学校教育活動の活性化を図り，それによって地域の教育力向上を目指す。

②連携の方法及び具体的な活動計画

平成 26 年 4 月に予定されている茨城町立桜丘中学校と梅香中学校の学校再編統合が有意義なものになるように教育支援活動を行う。具体的には，再編統合に向けて行われる両中学校の共同活動に参画し，教育支援を行う。(1) 5 月の両校の集団宿泊活動（於：国立磐梯青少年交流の家）への参画。(2) 7 月から断続的に行う両校の「教員研修」における指導。(3) 両校の学校再編統合と関係するボランティア活動等や，授業への教育支援活動。(4) 12 月に予定されている両校の生徒主催の「学校再編統合シンポジウム」への協力。(5) 再編統合によって誕生する新生「茨城町立青葉中学校」の校歌の作詞作曲。

③期待される成果

自治体側である茨城町教育委員会は，急務の課題となっている学校再編統合への教育的支援活動に期待している。その理由は以下の通りである。平成 26 年 4 月，茨城町立桜丘中学校と梅香中学校が統合されて青葉中学校となるが，それは単なる学校の統廃合ではない。両中学校には歴史的に培われた独自性があり，地域に根差した独自な文化が反映されている。それらを生かし，新しい学校文化を作り上げるには種々の教育課題がある。教育委員会としては，そうした教育課題を解決するための教育的支援活動を期待すると共に，新しい学校が種々の教育理論を検証する実践の「場」として大学の研究に役立てられることを望む。そうした教育支援諸活動を通して，大学と自治体による地域連携モデルを提案したい。

大学側からは以下の諸点で期待される成果が出されることを強調しておきたい。少子化等の問題により，近年多くの地域で学校統廃合が行われている。その際には，学校，教育行政，地域住民たちが相互に協力して，異なる文化を継承し，それぞれの学校の良さや問題点を，新しく誕生する学校に集約させる必要がある。大学が，このような地域の取り組みに積極的に参画し，理論的・実践的な貢献を果たすことは，地域に開かれた大学として十分な意味がある。またこのプロジェクト事業は，今後予定される他の地方自治体の学校統廃合支援事業のモデルケースとなることが期待できる。

以上のような趣旨を生かすために，この事業では，学校統廃合をめぐる諸問題を検討する研究会

やシンポジウム等を開催すると共に，新しく誕生する青葉中学校が開校するまでの軌跡を報告書あるいは著作にまとめる予定である。そうすることによって茨城町教育委員会と茨城大学との地域連携事業の成果が広く一般に認知されることが期待できる。

プロジェクトの実施成果

①活動実績

桜丘中学校と梅香中学校の統合に向けての最初の合同行事となった集団宿泊学習は，平成25年5月30日から6月1日にかけて福島県国立磐梯青少年交流の家で行われた。この行事には，小川の他に，学部生の湯山と新谷が参加した。彼らは，単に宿泊活動への支援だけではなく，磐梯山登山に両中学の教諭らの指導のサポートも行った。彼らの記録によれば，両校の生徒たちが初めて対面した一日目の「夕べのつどい」では，生徒たちがどのように接していけばいいのか分からず戸惑っていたが，班ごとの話し合い活動では一種の緊張感と共に互いの距離を測りながらの交流があったという。二日目の登山では，最初は話すこともなく黙々と登っていた生徒たちが，次第に声を掛け合ったり，荷物を持ちあったりして協力し合うようになったという。そして頂上にたどり着くと出発前には想像できなかったほど近しい関係になった。統合に向けてのこのような共同活動は，両校の生徒の精神的な絆を強めるために重要な役割を果たしていることが明らかになった。

大学院生の西村は，7月12日に桜丘中学校の理科教諭加藤毅氏と協力してICT教育実践を行い，新しい理科授業のあり方を模索した。同中学校ではまだICT機器設備が十分でないため，茨城大学教育学部のICT機器を活用していただいた。授業では，人間の血液や循環器系を理解させるために，導入部では画像や動画を極力見せないようにして，視覚的な教育的効果を最大限に生かす授業展開にした。そうした教育活動を通して生徒たちは人の体の仕組み，特に循環器の仕組みや血液がどのように流れるのかを多様な角度から検討した上で，画像や動画で確認をした。この授業のアンケートではICT教育の有効活用のあり方が確認できた。

ところで両校の教員による最初の統合準備活動は，7月22日に梅香中学校で行われた「全体会」と「部員会」であった。これらの会合の目的は，統合に向けて諸活動をよりスムーズに実践し，両校職員のつながりを深めるアイディアを出し合ったりして，よりよい人的・物的環境づくりに努めることであった。全体会における協議会には，小川が「統合に向けての協力活動」について講話を行った。

こうした共同活動とは別に，両校への教育活動の支援としては，桜丘中では8月5日に総合的な学習の時間を使った「茨城町の歴史をフィールドする」に小川が参画し，生徒たちの学習支援を行っている。最初の訪問先は，茨城町の歴史的文化財である「木村家住宅」であった。この住宅は江戸時代の長岡宿の脇本陣で，小大名が宿泊した本陣の予備に当たるものである。こうした脇本陣跡は茨城県下でも極めて少なく希少価値が高い。映画「桜田門外の変」のロケセットとしても使用されたことは生徒たちには興味深かったようだ。次に1936年（昭和11年）に廃線になった水戸と茨城町を結んでいた「水戸電気鉄道線」の橋げた跡を訪問した。現在鉄道線の跡は，わずかに一般の民家の一部として残っているだけだが，当時茨城町に鉄道が通っていたことを知らない生徒たちの多くは強い関心を示していた。この鉄道線が，実は現在の常磐線の代替になる予定があったエピソードも関心を引いたようであった。最後に，茨城町にある東日本でも有数の規模を誇る中世城郭「小幡城」を訪問した。この古城跡は，すでに外郭の一部は高速道路建設によって破壊されているが，それ以外はほぼ当時のままで残されている。記録によると現在の城域が整備されたのは元亀～天正年間（1570代）である，府中城の大掾氏を攻略するための拠点となったこと等の歴的事実の説明を聞きながら，生徒たちは実際の城壁跡を丹念に調べ，茨城町の歴史的痕跡に大きな興味を持った

ようだ。彼らは，これらの訪問先の概要をレポートにまとめて，その後授業で発表している。小川はフィールドワークで注意すべき様々な観点や，レポートのまとめ方等で教育支援を行った。

他方梅香中では，学部生の湯山が梅香中学校の学力向上の取り組みの一つである「クイズ選手権」に参画し，生徒たちの運営のサポートを行った。湯山によれば，学力的な格差が大きい梅香中の生徒たちだが，この選手権ではクイズ形式の学習によって下級生が上級生に勝つケースがあることが生徒たちの知的興味を高めていること等に教育的意義があるという。湯山やこの選手権の準備段階から参画し，その記録やアンケート調査などの結果を卒業論文にまとめている。

さて両校の統合に向けて最も重要な行事となったのは，12 月 20 日の「統合シンポジウム」である。このシンポジウムは両校の生徒たちが主役になって行事の運営を図ったものである。同シンポジウムは，両校の生徒 360 名と保護者 80 名が，完成したばかりの新生青葉中学校の見学会を兼ねて行われた。シンポジスト両校生徒たちの積極的な発言だけではなく，フロアからも活発な意見が出て，統合される青葉中学校への思いと，桜丘と梅香の良い点を継承していきたい旨の意見が出された。このシンポジウムに合わせて，茨城大学教授の橋浦と田中は，新生青葉中学校の校歌の作詞作曲を行った。その校歌は，茨城大学のアカペラ合唱団「音もなか」によって披露され，好評であった。尚，このシンポジウムについては，平成 25 年 12 月 26 日の茨城新聞に取り上げられている（①茨城新聞平成 25 年 12 月 26 日付記事を参照のこと）。

このように今回のプロジェクトでは，茨城大学として地域連携の観点から，学校再編統合に向けた諸活動に様々な側面から支援活動を行うことができた。こうした諸々の点は実績として評価できると思われる。

②プロジェクトの達成状況

両中学校の生徒が最初に行った共同活動である集団宿泊学習から，職員同士の意見交換等，学校再編統合の具体的な作業は，様々な問題を孕みながら進められた。茨城大学としては，教員や学生が一体となって再編統合への支援活動やサポートを行うことができた。そのような点でプロジェクトの効果はかなり高いものがあったと思う。

そうした統合に向けて行われた諸活動は，様々な記録等をもとにして出版化されることになっていたため，小川は，桜丘中の佐藤和彦校長と梅香中の廣戸隆校長と早い段階から情報交換し，頻繁に編集会議を行った。その成果は，『二つの学びが新生する公立学校－茨城町立青葉中学校の誕生－』（②表紙参照のこと）を平成 26 年 3 月 28 日に発刊する形で結実した。この著作は本プロジェクトの報告書を兼ねるものであるが，その内容には，統合までの軌跡と，二つの学校の独自な教育文化，そして新生青葉中学校の開設に対する期待が書かれている。その意味でこの著作は，当プロジェクトの成果の有効性が確認できるものとして重要である。

発刊後，この著作は新聞報道等で取り上げられ，茨城大学の戦略的連携プロジェクトの成果が広く紹介されることになった（③ａ茨城新聞平成 26 年 4 月 3 日付記事，③ｂ4 月 5 日付記事を参照のこと）。

③今後の計画と課題

このように今回のプロジェクトは，地域連携の一つのモデルとして重要な成果をあげることができたが，両校の教育文化は大きく異なっており，学力やスポーツ活動の面でも，その格差も大きいことが明らかになっている。こうした二つの異なる教育文化を一つにまとめ，それを統合していく作業には様々な問題が横たわっているように思われる。

その意味で再編統合される新生青葉中学校は，創設当初から様々な問題を抱えることになるだろう。そのため，学校の統廃合の円滑に進めていくことを趣旨としたこの種の事業の本当の真価は来年度の青葉中学校の状況によって確認される必要がある。そのため，是非ともこの事業が継続されるよう次年度の採択を強く望みたい。

〈関連資料〉

新校舎見学やシンポ

来春開校の茨城町・青葉中

茨城町立桜丘中（佐藤和彦校長）と町立梅香中（広戸隆校長）が統合し、同町奥谷に来春開校する「青葉中」校舎が完成したことを受け、両校生徒による見学会とシンポジウムが20日、新校舎で開かれた。

両校の統合は町小中学校再編計画の一環。新校舎は桜丘中の校舎を解体して整備された。

この日は、両校生徒360人と保護者80人が真新しい校舎内を見学。内装にふんだんに使われた木の香りが漂う中、統合後の中学生活に思いをはせた。廊下を兼ねた多目的スペースやコンピューター室、図書室などの特別教室では歓声が上がった。

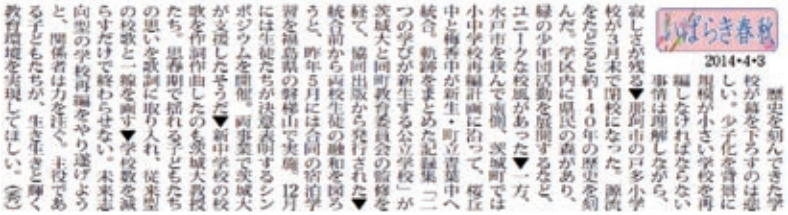
シンポジウムでは、桜丘中２年の中村涼香さんが「梅香、桜丘の心の壁がない学校にしたい。たくさんの人のいいところを見つけたい」と話し、梅香中２年の斎藤彩花さんも「協力し壁をなくしたい。生徒中心の青葉中づくりを進め、悔いのない学校生活を送りたい」などと意見を述べた。

新校舎は年度内は桜丘中が使用。来年１月18日に完成式典を開き、来年度から青葉中の校舎となる。（武藤秀明）

桜丘中と梅香中統合で来春生まれる青葉中をどうするか意見を交換したシンポジウム＝茨城町奥谷

①茨城新聞　平成 25 年 12 月 26 日付記事

②茨城大学（戦略的連携プロジェクト）・茨城町教育委員会監修 / 小川哲哉・佐藤和彦・廣戸隆編著『二つの学びが新生する公立学校－茨城町立青葉中学校の誕生―』協同出版, 平成 26 年 3 月 28 日。



ひばらき春秋　2014・4・3

歴史を刻んできた学校が幕を下ろすのは悲しい。少子化を背景に規模が小さい学校を再編しなければならない事情は理解しながら、寂しさが残る▼那珂市の戸多小学校が３月末で閉校になった。源流をたどると約１４０年の歴史を刻んだ。学区内に県民の森があり、緑の少年団活動を展開するなど、ユニークな校風があった▼一方、水戸市を挟んで南側、茨城町では小中学校再編計画に沿って、桜丘中と梅香中が新生・町立青葉中へ統合。軌跡をまとめた記録集「二つの学びが新生する公立学校」が茨城大と同町教育委員会の監修を経て、協同出版から発行された▼統合前から両校生徒の融和を図ろうと、昨年５月には合同の宿泊学習を福島県の磐梯山で実施。12月には生徒たちが決意表明するシンポジウムを開催。両事業で茨城大が支援したそうだ▼新中学校の校歌を作詞作曲したのも茨城大教授たち。思春期で揺れる子どもたちの思いを歌詞に取り入れ、従来型の校歌と一線を画す▼学校数を減らすだけで終わらせない。未来志向型の学校再編をやり遂げようと、関係者は力を注ぐ。主役である子どもたちが、生き生きと輝く教育環境を実現してほしい。（茂）

③ａ　茨城新聞　平成 26 年 4 月 3 日付記事

統合と誕生 軌跡追う

茨城町 青葉中の記録集出版

茨城町の小中学校再編に伴って今年統合され、新生・町立青葉中としてスタートを切った旧桜丘中と旧梅香中の軌跡を追う記録集「二つの学びが新生する公立学校―茨城町立青葉中学校の誕生」（協同出版・税別1500円）が3月28日付で、出版された。同書には、町や両校の教育方針の以下はが、統合前に行われた同窓生学習の試み、新「校歌」誕生への関係者の思いなどが盛り込まれている。

両校統合事業は、茨城町が、市町村合併化、本年度開始する町内小中学校の1年生対象の北海道上富良野町体験学習を紹介。さらに、同大学生が町の学校統合問題へ積極的に関わった経過を説明している。

同書は4部構成。第1部「学校教育と地域」では、町小中学校再編計画の全体像などに触れ、第2・3部は桜丘中と梅香中それぞれの沿革や教育内容、校風を統合前の2011年3月データを基に対比、第4部「二つの学びが新生する公立学校」は、学校再編統合への軌跡を追う。

同書は「学校統合事業に伴って公立学校の新設校を作成するなら、心に残るものの、多くの人の目に触れるものしたいと思っていた。書籍化が実現できて良かったと思った」と話した。

町教委は、新生・青葉中の教育文化振興に向け、記録集を役立てていくべく、問い合わせは協同出版☎03（3295）1341。（武藤秀明）

統合記録集を手にする茨城町の鈴木由美教育長（中央）と旧桜丘中の佐藤和彦校長（左）、旧梅香中の広戸隆校長＝町役場

③ｂ　茨城新聞　平成 26 年 4 月 5 日付記事